

Anonymous Classic Guitar 1840's



オリジナルと思われるコフィン（棺桶型）ケースも美しいコンディションで残るクラシック・ギターで、バロック・ギターにも通じる小ぶりなボディが特徴的だ。“1840年代にヨーロッパで作られたギターみたいなんだけど、手に入れたのは日本”という1本で、G.ピアンキのNo.310（P77）と同様に“一時期、ルネッサンスっぽい感じの古いギターを探してた”という中で出会った楽器である。とりわけボディ外周のバインディングやブリッジの形状に手工の跡が色濃くうかがえ、独特の風合いを醸し出している。

Anonymous Futura Type



近藤真彦のセットリストをケース内から発見！

スティーヴンス・ギター（P109）と同じギブソン・フューチュラを再現したモデルだが、コーナ・ボディのスティーヴンスに対して、メーカー不詳の本器はマホガニーである。ボディとネックの詳細は不明だが、“パーツはすべて1960年代のギブソン製で、でもギブソンが1960年代にフューチュラを作った記録はないので得体が知れない”。しかも“それでいてトレモロは後付けではなく、もともと付いてたみたい”で、その根拠はオリジナルを採寸して作られたスティーヴンスと比較すると明らかだが、“後付けだとしたらトレモロとコントロールが干渉するはずなのに、最初からコントロールがズラしてある”のだ。オーダー品の可能性もあるが、野村が入手した30年以上前に1960年代パーツを使って組まれたというのも不自然で、謎は尽きない。近藤真彦の96年のライブで使用した。

The Fool SG Paint
Anonymous Stratocaster Type



“どこのモノかわからない安いギターを買ってはペイントするのが好きな人がいて、その人が売りに出した”という2本で、いずれもメーカー不詳のストラト・タイプに歴史的なギターの柄が描かれている。左はクラブトンのザ・フールSGをストラトに置き換えており、オリジナルをアレンジしてピックガードにまで精緻なイラストがあらわれている。右も同じ素性のギターで、こちらはジミ・ヘンドリックスのモンタレー・ポップ・フェスティバル・ストラトをモチーフにしたモデルだ。ヘッドのフェンダー・デカールは、本器に関しては野村によるものではなく、ペイントを施した人物が本来ついていたロゴを剥がして後貼りしたものだ。自身も同じ試みをしてきただけあり、“作り手は純粋に楽しんでいるんだろうな”と共感の様だ。

Anonymous Stratocaster Type 1970's



“1970年代初頭あたりの中国製ストラト・コピーで、本物よりも数が少ないレアなギター（笑）”と語る本器は、ラージヘッド仕様を踏襲しながらもご愛敬のスペックがちりばめられている。“ネックは1ピースで、ローズウッド指板を貼るんじゃなくて、ローズっぽい色の木を使って、ヘッドとネック裏側をメイプルっぽい色に塗ってある”うえに“PUは釘で打ってあって、ペグもクラシック・ギター風のものが付いている”。さらに印刷と思われるデカールはスモール・ヘッド最終期のトランジション・ロゴに似ており、SYNCHRONIZED TREMOLOの表記もあるが、ブリッジ・ユニットはダイナミック・トレモロ風を搭載している。20年ほど前にコレクターの友人から譲り受けた逸品で、“音が鳴るかどうかともわからないエセラトキャスト”だ。

Anonymous Stratocaster Type
Monterey Pop festival Paint



Anonymous Tenor Guitar



“オークションで入手した謎のテナー・ギターで年式不明。買った人も素性がわからなかったみたいで、僕もわからない”という1本で、細身の4弦ネックに大ぶりのボディが際立つルックスが特徴的だ。曰く“ちょっとだけデザインを間違えた感じっていうか、ずんぐりむっくりしてて、それが魅力的。誰が作ったのかまったくわからないけど、4弦っていう時点でかなりセンスがいい！”とお気に入り。ボディ・トップが割れた状態で組まれたPUは後付けだと推測しており、“あとから無理やり付けたからこんなことになってるんじゃないかな。いつか直してあげたいんだけどね”と語っている。ボディの色合いやヘッド形状については“グレッチのパラシュート・ウクレレとも似てる”と指摘する。